する姿を子どもに見せたい気持ちは、父親も母親も同じだと思うんです。

私は「ママさんアスリート」とか、「出産したのに頑張っている」と言われなくなるのが本当の姿かなと考えています。例えば、パラリンピックだと、障害があるアスリートがどこまで限界に挑んでいるかがきちんと評価されます。子どもがいる人も、いない人も、同じフィールドで競い合う中で、家事や育児などと両立させているからといって加点がもらえるわけではありませんよね。後から、「この選手は子育てもしていたんだ」とわかるくらいがいいですね。

家庭と両立させる女性アスリートが自然に頑張ることができるような環境を整えていきたいと思っています。

必死で育児をした経験が仕事に活かされています

私自身は、引退後に長女を出産しましたが、五輪関連の仕事で海外へ行くことが多かったので、両家の母と夫とベビーシッターにサポートしてもらいました。東京2020大会が決まる前の重要な時期にIOCの視察団を案内しているバスの中でベビーシッターから電話がかかってきて、座席の下でコソコソ話したことも。仕事をしている母親の誰もが経験するバタバタぶりを、今は懐かしく思います。海外を飛び回って優雅に見えていたかもしれませんが、全力で必死に走り抜けてきました(笑)。

我が家では家事も育児も分担するのが当たり前。ふたりとも体育会系だから、合宿感覚ですね。夫は大学教授で、自分のペースで仕事を調整してくれているので、スムーズに分担できています。だから後輩には「結婚するなら大学の先生がいいわよ」と勧めているんです(笑)。

一昨年、ユース五輪の団長を任されたとき、選手の母親のように「ご飯食べたの?」とか積極的に声をかけていたんです。すると副団長の男性に「やっぱり団長は女性がいいよな」と言われ、女性の目線や育児経験が役立つことを実感しました。

アスリートを支える側の環境づくり

子どもがいるアスリートに関しては理解も深まっています。しかし、指導者をはじめとするアスリートを支える側の人たちは、選手と同等のサポートがなく家庭と両立させることが難しいため、女性のコーチやスタッフなどは少ないのが現状です。

JOCをはじめとする競技連盟などでは、団体運営に携わる女性役員の数は増えてきており、さらに増やそうと男性からも好意的で前向きな意見が出ています。その一方で、アスリートに一番近い現場で実務をしている職員に管理職クラスの女性が少ないのが課題。女性アスリートが活躍しやすい環境を整えるには、それを理解しながら、実務レベルでサポートする女性スタッフを増やすことが必要です。

ところが、女性スタッフは、ほぼボランティアで夜遅くまで活動しているケースが多く、家事や育児との両立だけでなく、経済的な問題も抱えています。現場に女性を増やそうと、意識は変わってきているのに、待遇などの実態が追いついていません。仕事に見合った収入が得られれば、家族の理解も得られ、家庭を持つ女性も働きやすくなるので、今後は女性スタッフが働く環境の改善を考えていきたいです。

東京2020オリンピック・パラリンピックでは応援力で選手にパワーを!

東京2020大会では「応援力」を高めたいです。ラグビーワールドカップで、選手と応援する側の一体感、勝利を分かち合う喜びを感じた人も多いと思います。選手がよく「応援が力になりました」というのは社交辞令ではなく、本当に力が湧くんですよ。私自身も、声援だけでなく観客の存在そのものがパワーになり、演技をしていて幸せで仕方なく、やればやるほどエネルギーが湧いてきて、気づいたら優勝していたという経験があります。「日本の応援は素晴らしかったな」と言ってもらえるようムーブメントを起こしていきたいです。

そして、家庭との両立に苦労しながらボランティアで競技や選手を支えている競技スタッフには、選手の活躍を自分のことのように喜んでもらいたいですね。選手だけでなく、それを陰で支える多くの人たちも応援しています。